

ロイ・ジョンソンのラッキー・カード

麦谷眞里

(まえがき)これは、Roy Johnson が1987年から1990年の間にレクチャーをした際に販売していた単売のカード・マジックです(写真982)。いまはもう売っていないようですが、読者の中に、昔、購入された方がいらっしゃったら、ご容赦ください。



写真982

このカード・マジックを選んだ理由は2つあります。ひとつは、ロイ・ジョンソンの作品は、英語国（少なくとも英語に慣れている人）用に構築された内容で、日本で演じられないことはありませ

んが、いまひとつ面白みに欠けます。また、その理由から、かつて購入された方も、おそらく実際に演じられたことではないのではないかと思います。もうひとつの理由は、クロース・アップでもプラットフォーム(ステージ)でも演じられるカード・マジックはカード・アクロスを除くと、意外に少ないので、この作品はそういう観点からも適しているのです。ロイ・ジョンソンは、オリジナルのバージョンと新しいバージョンとの2つを発表していて、今回、ご紹介するのは新しいバージョンのほうです。英語で表現されているものはすべて日本語に改めて演じ方もかなり変えてあります。

[現象]マジシャンは、デックの中に入っている「幸運のカード」を客が引いたら、賞品を差し上げます、と言って、シャンパンなどの賞品を紹介します。次いで、客に、52枚のデックの中から、好きな1枚の名前を挙げてもらいます。これは、デックから選ばせるのではなくて、心の中で任意に思い浮かべてもらうのです。ここでは、仮にそれが△3であったとします。マジシャンは、デックを表向きに拡げて、中から△3を表向きで抜き出して、テーブルの上に置きます。すべての観客から、テーブル上の△3が見えています。マジシャンは、「このカードが『あたり』だったらしいですね。実は、始まる前に、すべてのカードの裏に「あたり」か「ハズレ」か書いておいたのです」と言って、デックを裏向きにして各カードの裏を見せます。カードの裏には、ことごとく「あたり」と書いてあります。「ほとんどのカードが『あたり』だったのですよ」と言いながら、最後にテーブル上の客のカード△3を裏向きにすると、そのカードの裏には「ハズレ」と書いてあります。「これだけが『ハズレ』のカードだったんです。賞品はもらえませんでしたが、珍しいことです」と言って終わります。

[必要なもの]

- ①赤裏のデック 2組（青裏でもできないことはありませんが、裏にマジック・インクで文字を書くので赤裏のほうが見やすいです）
- ②油性のマジック・インク 濃い色であれば、黒でも紺でも紫でもかいません。

[準備]

- ①赤裏の2組のデックを、説明のためにAとBとします。
- ②まず、Aからジョーカーを除いた残りの52枚のカードの裏右半分に、マジック・インクで「あたり」と書きます(写真983)。
- ③次に、Bからもジョーカーを除いた残りの52枚のカードの裏右半分に、マジック・インクで「ハズレ」と書きます(写真983)。
- ④Aのカード・ケースのどこかに目立たないように「グ」と書きます(写真984)。一方、Bのカード・ケースには、これも目立たないように「キ」と書きます(写真984)。
- ⑤A、Bそれぞれのデックをよくシャッフルします。
- ⑥まず、Aのデックを奇数のカードと偶数のカードとに分けます。次に、Bのデックも奇数のカードと偶数のカードとに分けます。



写真983



写真984

- ⑦Aのデックから分けた奇数のカードを表向きでテーブルの上に置き、この上に、Bのデックから分けた偶数のカードを表向きで載せます(写真985)。
⑧いまできた新しいパケットを「グ」と書いたAのカード・ケースに表向きで入れます。

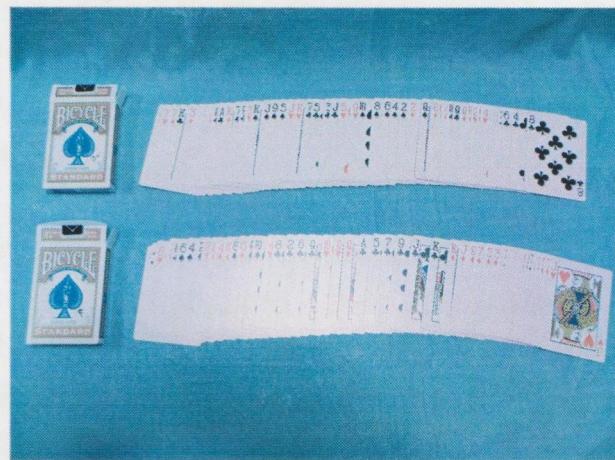


写真985

- ⑨残っているAからの偶数のカードを表向きでテーブルの上に置き、この上に、Bから残っている奇数のカードを載せます(写真985)。
- ⑩いまできたパケットを「キ」と書いたBのカード・ケースに表向きで入れます。
- ⑪「グ」のデックを上着の左ポケットに、「キ」のデックを上着の右ポケットに入れておきます。
- ⑫「賞品」を用意しておきます。祝儀袋に「賞品」と書いたものでもかまいませんが、一種の射幸心を煽るためにシャンパンなどの具体的な賞品のほうが効果的です。

[やり方]

- ①マジシャンは、「これから、お客様に参加していただいて一種のゲームを行ないます。このゲームに勝った人には賞品があります。これが今日の賞品です」と言いながら賞品を示します。続けて、「実は、このゲームの勝てる確率は非常に高くて、勝率は何と98%です。つまり、負ける可能性がきわめて低いゲームですので安心してください」と言います。
- ②ここで、観客の中からゲームに参加する人を募ります。勝率98%と説明しておきながら最後には負けますので、子どもは避けたほうが賢明です。大人の客を選びます。
- ③客に向かい、「トランプは全部で何枚あるかご存知ですか?」と訊きます。即答できなかつたら、 $13 \times 4 = 52$ 枚であることを説明します。これは、勝率の計算に関係しますから重要な要素です。
- ④「では、その52枚の中から、お好きな1枚を選んで心に思い浮かべてください。ただし、ジョーカーは含まれていませんから、ダメですよ」ここで、ジョーカーが含まれていないことを注意喚起しておきます。
- ⑤「決まりましたか?」客が決めたら、「選んだカードは何ですか?」と訊きます。そして、客が答えたら、ただちに、その当該カードのカード・ケースを上着の左ポケットもしくは右ポケットから取り出します。ここでは、仮に、客が♦Jを選んだとします。Jは奇数ですから、上着の右ポケットから「キ」のカード・ケースを取り出します。
- ⑥「キ」のカード・ケースの中のデックは、上半分が「あたり」と書いてある偶数のカードで、下半分が「ハズレ」と書いてある奇数のカードです。デックは、準備のところで表向きに入れてありますから、ケースを開けて、デックを表向きに出します。「クラブのジャックでしたね」と客のカードの名前を言いながら、デックを両手の間に表向きで拡げて、♦Jを探します。表向きで拡げたデックの上半分の中にあります。見つけたら、客に確認して、そのカード(♦J)を表向きのまま、テーブルの上に出します(写真986)。
- ⑦「あなたの選んだこのカードが『あたり』だったら、賞品はあなたのものです。実は、『あたり』か『ハズレ』かは、カードの裏にあらかじめ書いてあったのです」と言いながら、デックをそのまま裏向きにして、トップ・カードの裏に「あたり」と書いてあることを見せます。次いで、その次のカード、その次のカード、と次々に「あたり」と書いてあることを見せます(写真987)。このまま、デックをテーブル上にリボン・スプレッドします。ただし、下半分の文字は見えないように注意します(写真988)。



写真986



写真987



写真988

⑧「ご覧の通り、ほとんどのカードは『あたり』だったのです」と言ってから、「それでは、あなたの選んだカードはどうだったでしょうか?」と言いながら、テーブルの上に表向きで出してある♣Jを取り上げて裏向きにすると、そこには「ハズレ」と書いてあります(写真989)。がっかりした客

に向かって、「これは、本当に珍しいことです」と言って終わります。

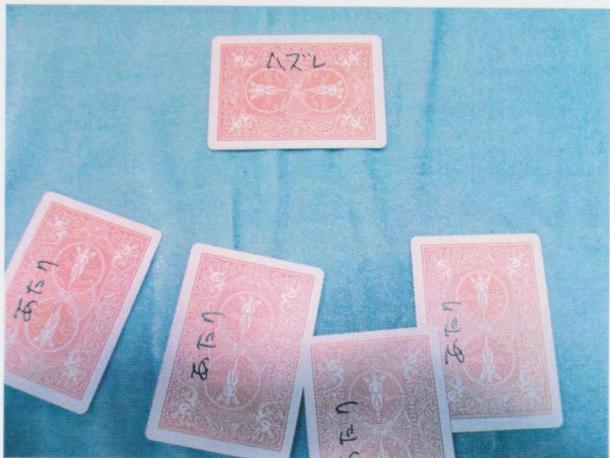


写真989

⑨客が、偶数のカードを選んだ場合は、左ポケットからカード・ケースを取り出します。後は同じです。表向きでデックを取り出して、客のカードを抜き出し、テーブル上に表向きで置きます。残りのデックを裏向きにすると、ほとんど「あたり」で、客の選んだカードを裏向きにすると「ハズレ」です。

[コメント]

次の、“Fred Trick”を特集しようと思って、最初に、具体的なカード・マジックの例をあげたほうがわかりやすいので、ロイ・ジョンソンの作品を取り上げました。

Fred Trickについて

麦谷眞里

(はじめに)Fred Trick もしくは Fred Type Trick というのは、観客が52枚のデックの中から自由に選んだ1枚のカードの裏にだけ、マジシャンが予め印を付けてある現象のカード・マジックのことを総称します。前掲の「ラッキー・カード」はその亜型で、広義の意味での Fred Trick と呼ぶことに反対の人はいないと思います。

1970年に、“Christened Reverse”という単売のカード・マジックが販売されました。この商品の現象が、前述の、客の選んだカードの裏にだけ“Fred”と書いてあるものでした。なぜ、Fred だったのかというのは単純で、この商品の考案・販売者が Fred Lowe だったからです。以後、この種の現象の作品や商品がたくさん市場に現れることになりました。それで、そのような類似現象のカード・マジックをすべて“Fred Trick”と呼ぶようになったというわけです。

調べると、雑誌や本に発表・解説されたもの以外にも現象がいいのか単売の商品もけっこうあって、すぐに20くらいにはなります。けっこう名の知れたマジシャンも独自のやり方を発表してい

て、多くのマジシャンたちの関心を惹いたことがわかります。ただし、中には、疑問符をつけたくなるような作品もあって、たとえば、Stephen Tucker の "Spell-Binder" Vol.3-No.33 に掲載・発表された Bill Worsley の "It's a Swindle" という作品は、Stephen Tucker は讃めているのですが、チェンジング・バッグを使う演出になっていて、これでもカード・マジックか？と思います。

それぞれに一長一短あって、また演者の好みにもよりますが、いくつかコメントしてみます。

1. Eugene Burger

ユージン・バーガーの "Fred Trick" は、"The Devil's Deck" というタイトルで、彼の著書 "The Experience of Magic" (1989年) に収載されています。丁寧に解説すると、これだけで紙数が尽きかねないほどの作品です。ユージン・バーガー独特の語り口で演じられると、きっと素晴らしい手品ですが、これは、あらかじめ、ターゲットにしておいた客のためにカードを準備して演じますから、選ばれたカードの裏に、あらかじめその人の名前が書いてあるので、いささかルール違反の感じがしないでもありません。しかも、この名前付きカードを、あたかもその当該の客が自由に選んだように思わせるために、15枚も用意して誘導するのです。

なかなかよくできっていて、マニアでもひっかかりますが、準備がたいへんになると、とにかく、たった一人の客のために演じますから、日本では、パーティーなどであらかじめ、そのターゲットの人が出席するとわかっているときにしか演じられないで、そういうチャンスにうまく遭遇しないと、実演は難しいと思われます。

2. Edward Marlo

Ed Marlo の "Fred Trick" は、"Female" というタイトルで、彼の "Thirty Five Years Later" (1986年) というレクチャー・ノートに収められています。このレクチャーはビデオでも単売されていますが、画質・音質ともに相当悪いです。さて、観客の中の女性の客に、ジョーカーを含むデック53枚の中から心の中で自由に任意のカードを選んでもらいます。仮にそれが△2であったとします。マジシャンは、デックの中から、彼女の言った△2を表向きで抜き出してテーブルの上に置きます。マジシャンがデックの残りのカードを点検すると、すべてのカードの裏に男の名前が書いてあります。そして、テーブルに出した、女性客の選んだカードだけが女性の名前が書いてあるのだと説明します。そして、その女性客の名前を訊ねます。仮に、Mary だったとします。そこで、テーブル上の△2を裏向きにすると、Mary と書いてあります。唯一の女性の名前でしかもカードを選んだ客の名前が書いてあるというわけです。それで、タイトルが "Female" なのです。

やり方は、2枚のジョーカーをボトムに置いて、最もボトムのジョーカーの表側に、マジシャンズ・ワックスが付けてあります。同時に、このジョーカーの裏に、サインペンで会場にいる女性の名前を前もって書いておきます。これは、会場で、名札とか、名前を誰かに呼ばれるとか、そういう機会をとらえて、女性の名前を知るのです。そして、ひそかに事前にその女性の名前を書いて準備しておきます。あとは、会場で、その女性を指名して、任意のカードを選ばせるだけです。女性が選んだカードは表向きのデックの中から探し出してデックのボトムにあるジョーカーの上に重ねま

す。このジョーカーにはマジシャンズ・ワックスが付いていますから、上から押さえると、客の選んだカードとジョーカーとがくっつきます。くっつけたら、この2枚をあたかも1枚のカードのように扱って、客の選んだ♦2をテーブル上に表向きで置きます。デックの中から適当なカードを抜いて裏向きにして、裏に男の名前が書いてあることを見せます。次々と数枚見せたら、デックをテーブル上に裏向きにリボン・スプレッドして、すべてに男の名前が書いてあることを見せます。次いで、表向きの♦2を取り上げ、客に名前を訊いてから裏向きにひっくり返すと、その女性客の名前が書いてあるのです。エド・マーローにしては単純な手品ですが、客の選んだカードをすぐに見つかるように、あらかじめデックをストートごとに分けて整理しておいたほうがよい、と助言しています。客の選ぶカードは任意ですから、すぐに探せないことが多いので、これはいい助言です。

3. Matthew Johnson

彼の“Fred Trick”は、Nick Trost の単売商品“Oscar”的改案です。タイトルは、“Wish Upon a Star”というもので、デックのカードの裏に一枚ずつ異なる「物」の名前が書かれています。たとえば、「グラス」とか「ランプ」とか「鉛筆」とか、そのような「物」です。マジシャンはまず、折り畳まれてクリップに挟まれた予言の紙を客に示します。その予言をテーブル上に置いて、客に一組52枚のデックの中から1枚のカードを思い浮かべてもらいます。たとえばそれが♦7であったとします。そこで、デックを表向きに拡げて、♦7を探し、表向きでテーブル上に出します。次に、客の選んだ♦7を裏向きにひっくり返すと、裏には「リップ・クリーム」と書かれています。そこで、予言の紙を拡げると、紙には、「リップ・クリーム」ではなくて、「星(スター)」と書いてあります。マジシャンは困惑の表情で、この予言の紙にライターで火を点けると、閃光とともに、本物の「リップ・クリーム」に変わるという趣向です。確認してありませんが、ニック・トロストの原案は予言が当たって終わる現象なのではないでしょうか？

最後のタネは単純で、ポケットからライターを取り出して来るときに、同時に本物の「リップ・クリーム」をタバコのようにフィンガー・パークして来るのです。予言の紙はフラッシュ・ペーパーです。デックは、ペアの26枚のカード×2合計52枚から構成されていて、半分の裏には、さまざまな「物」の名前が書かれておりますが、残りの半分の裏には、すべて「リップ・クリーム」と書かれているものです。すなわち、前述の「ラッキー・カード」のデックのような構造です。

詳細なハンドリングは省きますが、ひとつだけ参考になることがあります。それは、26枚のペアの52枚を表向きでテーブル上にリボン・スプレッドしながら、「52枚のトランプはそれぞれちがうのですが、見えているトランプの中からお好きな1枚を心の中で思ってください」と言いながらスプレッドを閉じます。この、「見えているトランプ」というところがミソで、この誘導によって、準備してある26枚以外のカードが選ばれることを防ぐことができます。

4. David Acer

この“Fred Trick”は、1990年、“NOMEN OMEN”という商品名で、カナダの Camirand Academy から単売商品として販売されました。解説は、Gary Ouellet です。Gary Ouellet 自身

が、この作品を、F.F.F.F.(Fechter's Finger Flinging Frolic)で演じたところ、多くのトップ・クラスのマジシャンがひっかかったと書かれています。見せられると、「あ、フレッド・トリックだな」とわかりますが、それでもひっかかります。

デックは、なかなかに複雑で、26枚の同じカード(仮に♥8)の表面にラフ加工がしてあり、残りの26枚の異なるカードは、裏面にラフ加工してあります。これを1枚ずつ交互に重ねると、異なるカードの裏側に同じカードがくっついていて、表向きにリボン・スプレッドすると、すべて異なるカードのデックのように見えます(写真990:あえて♥8をずらして見えるようにしてあります)。



写真990

26枚の同一カード(♥8)の裏側にサインペンでそれぞれ異なる名前を書いておきます。そして、客にフォースするひとつの名前を残りの26枚の異なるカードのすべての裏に書いておきます。確認ですが、デックを裏向きにスプレッドすると、異なる名前が見え、表向きにスプレッドすると異なるカードが見えます。逆に、ペアを外すと、♥8と、ひとつの同じ名前になります。

現象は単純で、デックを裏向きのまま客に1枚選ばせると、名前はいろいろですが、その2枚のラフ加工のペアを外せば必ず♥8になります。また、デックを表向きのまま異なるカードの中から客に1枚選ばせると、これもラフ加工のペアを外せば、準備したひとつの名前になります。2つを予め紙に書いて予言しておけば、2つの予言が当たることになる手品です。

5. masquerade タイプの“Fred Trick”

これは、Gary Kurtz の“Unexplainable Acts”(1990年)に解説された“Name It”という作品を元に、素材も技法も演出やハンドリングも変えて私が構成したものです。原案はかなりのスライハンドで、しかも角度に弱いだけでなく、Max Maven 流のメンタルな要素もあって、演じるには、なかなかハードルが高いものでした。

[現象]マジシャンは、客がカードを選ぶ前に、ブランク・カードに予言を書いておきます。この予言は、あらかじめ、カードを選ぶ客以外の他の観客にも見せておきます。マジシャンがデックからカードを1枚ずつ配って行きますが、客は、自分の好きなところでストップをかけます。ストップがか

かったら、そこで手を止めて、そのときの客のカードを見せますが、まさしくマジシャンがブランク・カードに書いた予言のカードと一致しています。さらに、そのカードの裏を見せると、何とそこには、カードを選んだ客の名前が書いてあるのです！本人も他の観客も驚きます。

[必要なもの]

- ①青裏のブランク・カード 15枚程度
- ②赤裏のデック 1組
- ③サインペン 1本

[準備]

- ①青裏のブランク・カードの1枚に、サインペンで客にフォースする予定のカードの名前を書いておきます。ここでは、仮に、そのカードをクラブの6にしておきます（写真991）。

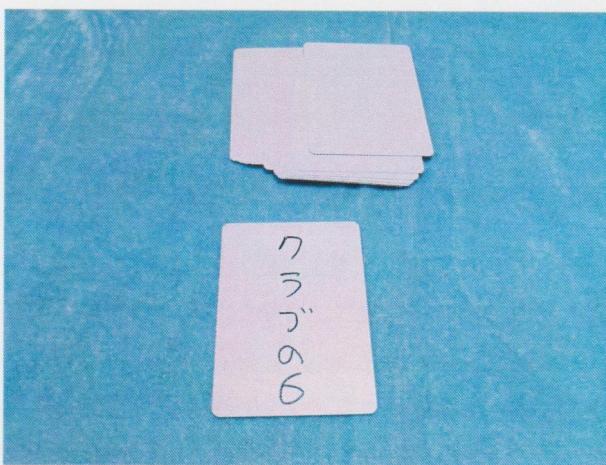


写真991

- ②そして、このカードを青裏の15枚のブランク・カードのトップに載せておきます。
- ③一方、赤裏のデックからフォースするクラブの6を抜き出して、デックのトップに置いて、そのままカード・ケースに入れておきます。

[やり方]

- ①赤裏のカード・ケースからデックを抜き出して、トップのクラブの6が乱れないようにシャッフルします。あるいは、フォースするクラブの6だけをショート・カードにしておいて、予めシャッフルしてからカード・ケースに入れておき、ケースから出したあとも客にシャッフルさせてもいいです。前述の Matthew Johnson は、“Wish Upon a Star”でこの方法を探っていました。これだと、デックを客に渡して自由にシャッフルさせた後、一回カットするだけでクラブの6は再びデックのトップに来ます。
- ②デックを脇に避け、青裏のブランク・カード15枚を軽く拡げてブランク・カードであることを見せます（写真992）。トップにある予言カードは見えないように注意します。ブランク・カードである

ことを見せたら閉じて重ね、全体を裏向きにして、ややラフにテーブル上に置いておきます。

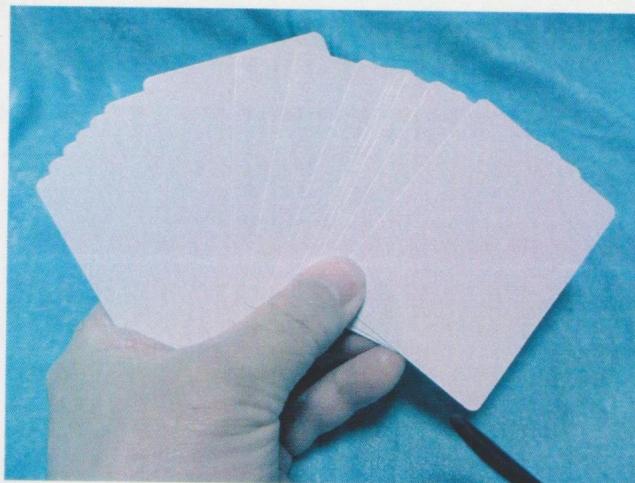


写真992

- ③「この白いカードにこれから予言を書きますが、そのまえに、どなたかお手伝いをしてくださる方をお願いします」と観客席からヴォランティアを募り前に出てきて椅子に座ってもらいます。手を上げる人がいなかつたら、こちらから適当な人をお願いします。客が座ったら、「ありがとうございます。今日はどちらからお見えになりましたか？」と訊いたあと、会話の中で「失礼ですが、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」と名前を訊ねます。ここでは、仮に、客が「加藤です」と言ったと仮定します。続けて、「加藤さん、お会いするのは今日が初めてですね？」と確認します。これで、客の名前が『加藤』であることが判明しました。大事な要素です。
- ④客に向かって、「それでは、これから1枚のトランプを選んでもらいますが、あらかじめ、この白いカードに、選ばれるトランプの名前を予言しておきます」と言いながら、まず、赤裏のデックを左手に裏向きに持ち、デック全体を立てながら、右手で、テーブルに重ねた青裏のブランク・カードの山から一番上のカードを取り上げて、赤裏のデックのトップに、白いブランク面が上になるように載せます。観客からは、マジシャンが青裏のブランク・カード1枚を赤裏のデックのトップに置いたように見えます(写真993)。



写真993

⑤「これから予言を書きますが、あなた以外の他のお客様には、あらかじめ予言の内容もお見せしておく予定です」と言って、右手でサインペンを取り上げて、あたかもブランク面に予言を書くような素振りで、実際は、青裏のブランク・カードは左親指でやや左下に引いて、赤裏のトップ・カード(♣6)の裏に、先ほど聞いた客の名前(加藤)を書きます(写真994)。



写真994

④書き終わったら、このカードのブランク面が客(加藤さん)に見えないように注意しながら、ブランク・カードの『予言』を他の観客に見せます。クラブの6と書いてありますから、観客はいまマジシャンが書いたものと思います。同時に、左手は、トップ・カードの裏が見えないように、手の甲が上になるようにして手首を返しておきます。

⑤青裏の予言カードを他の観客に示したら、このカードを裏向きにしてテーブルの上に一枚だけ置きます。「予言はここに置いておきます」と言います。

⑥左手は甲が上になったままで、テーブルの上に出し、右手で、デックの下、すなわちトップ・カードを下から引き抜く用意をします。このとき、右手の中指で、トップ・カードを少し押して、あたかもトップ・カードをグライドしたような位置に持って来ます(写真995:下から見たもの)。



写真995

⑦客(加藤さん)に向かい、「これから、一枚ずつ、裏向きにして、テーブル上に配って行きますの

で、お好きなところで、ストップと言ってください。いつでもどこでもかまいません」と言いながら、まず、ゆっくりと、デックの下から、一枚表向きで引き出して、裏向きにしてテーブル上に置きます(写真996)。トップ・カードの♣6はグライドしていますので、そのままトップにあります。



写真996

- ⑧続いて、その次のカードもゆっくり表向きで引っ張り出して、裏向きにして、さきほど、テーブル上に置いた赤裏のカードに重ねます。これを続けますが、ここから少しテンポを速めます。そして、「どこでもいいからストップをかけてくださいね」と言いながら、この配る動作を続けます。客がストップかけたら、そこで手を止め、グライドを戻し、♣6を表向きでテーブル上に出します。
- ⑨ただちに、「クラブの6のところでストップがかかりましたが、予言のカードを見てみましょう」と言って、テーブルに出してある裏向きの青裏の予言を表向きにします。「クラブの6」と書いてあります。客は予言が当たったのでびっくりします。
- ⑩「ところで、この1枚は、もともとあなたのためにだけ用意してあったトランプなのです。あなたの名前は何でしたか?」と訊ねます。客が、「加藤です」と答えますから、表向きのクラブの6をゆっくりと裏向きにして、すべての観客に『加藤』の文字を見せます(写真997)。客は、自分の名前がカードの裏に書いてあるので大いに驚きます。



写真997

[コメント]

この現象の手品は商品化しやすいのか、けっこう単売の商品が多く出ています。ということは、"Fred Trick"という一分野ができるくらいに、欧米人はこの種の手品(現象)が好きだということです。これには、欧米人がお互いをファースト・ネームで呼び合うことと関係がありそうです。したがって、会合やパーティーなどで呼び合っているのを目撃して、客の名前を察知することによって、この種の手品に応用できるという利点もあります。しかし、どうも漢字文化圏にはファースト・ネームで呼ぶ慣習がないように思います。韓国人やシンガポール人や一部の台湾人は、呼称のための英語のファースト・ネームを余分に持っている人を見かけますが、中国名、程連蘇(Chung Ling Soo)をいきなりウイリアムと呼べと言われても面食らうだけです。

ということで、いつもなら、詳細に解説するユージン・バーガーの手品もエドワード・マルローの手品も、紙数のことだけでなく、内容的にも日本で演じるのは難しいと考え、概要を紹介するだけにとどめました。

最後に、"Phil"という単売商品をご紹介します(写真998)。作者は、Trevor Duffy と Phil Goldstein です。これは、"Phil"と裏に書かれた(印刷された)カードが52枚あるので、文字通り何を選ばれても良いのが利点です。しかも、観客に異なる名前が書かれている(印刷されている)ことを見せるために、さらに26枚余分に付いています。その分、ダブル・デッカーのようにカードの厚さが薄く作られているのです。したがって、自分では作れません。20ドル(2600円)ですから、この種の手品が好きな人は一つ持っていてもいいと思います。



写真998

これは、aficionado の Vol.6-No.6 です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com

これは、限定100部のうちの08／100です。

(2022年6月)